

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'84 冬

連絡先
東京都渋谷区代々木2-21-11
婦選会館内 T151
振替 東京九一八九一
発行 一九八四年一月二日

も っ と 運 動 を !

自分たちの手でやらなければ、新しい状況はできません。家庭科教育に関する検討会議の検討結果が出るのはもうすぐです。その十二月に向けて——特にこの一、二週のうちに積極的に行動しましょう！

●検討会議委員へはがきを出しましょう。

自分の実感をこめて書きましょう。

これまでのところ、届いているはがきのうち八割までが現状維持の要請だと言います。自分だけでなく、まわりの人たちにも頼んで書いてもらいましょう。

●非民主的な手続きでとんでもない決議文を出した高校PTAに抗議の手紙を出しましょう。

●新聞などに積極的に投書しましょう。掲載されなくても、共修を求める意見がた

くさん届くことに意味があります。(朝日新聞では特に家庭科共修に関する意見や体験を募集しています。学芸部家庭科係あて。体験された方、特によろしく)。

●各都道府県教育委員会家庭科指導主事にもはがきを出しましょう。特に教育関係者の方、よろしくお願いします。

●臨時教育審議会委員にも働きかけましょう。(木村治美さんはすでに家庭科の男女共修は重要だと発言されています。)

●国会議員にも働きかけましょう。

●まわりの家庭科の先生と話し合う機会を持つてください。現状維持はあり得ないのだから、男女選択になつては困るのなら男女共修にするほかないのだと話して下さい。

も く じ

もっと運動を！	(1)
一〇・二七集会報告	(2)
世話人会報告	(5)
高校長協会家庭部会への要請文	(5)
連絡会報告	(6)
行動する会集会報告	(8)
家庭科共修、マスコミでは	
新聞・雑誌では	(8)
NHK・YOUを見て	(10)
朝のニュースワイドで	(10)
校長会が考える家庭科は――	(11)
母性教育ってナニ？	(11)
男性ばかりでつくられたPTA決議文	(12)

●会員をふやしましょう。

●署名は事務局に至急お送りください。今月初旬にとりまとめます。

現状維持を求める人たち(必ずしも共修に反対なのではなく、共修は実現不可能で、選択にしないためには現状維持しかないと思ひこんでいる人も多いのですが)は積極的に迫力ある運動を続けています。私たちももっと積極的になりましょう！(一〇・二七集会「運動の提案」から)

一〇・二七集会報告

男たちも訴える 実現させよう、家庭科男女共修！

テーマにふさわしく、八人連れの男子高校生をはじめ、多数の男性の参加を得て、活気のある集会となりました。

I 経過報告（要旨）

担当 梶谷 典子

国会答弁や共修を要求する人たちへの応待の変化をみると、文部省は共修に向けてやや積極的になったように思える。家庭科教育に関する検討会議では、和田典子世話人も意見を述べることできたし、共修の授業参観もしている。

各地、各団体でも共修を求める集会や署名運動が行われ、マスコミにも共修賛成の意見が多く現われている。臨教審委員の木村治美さんからも、共修についての積極的な発言があった。

私たちの共修要求とは違うが、日本教育大学協会第二部会技術・職業指導部門の改革案は注目に値する。

しかし、現状維持要求の運動の方が共修運動より迫力があるようだ。校長会、指導主事会の指導による署名運動、はがき運動、文部省、外務省、国会等への要請行動は精力的に行われている。参加者は必ずしも共修反対ではないのだが――。

共修運動ももっと強めなければいけない。

II 荒木敦さんのお話（要旨）

家庭科共修は現代の教育改革の鍵ではないだろうか。「人間はどう生きるか」が現在大きな問題だが、それを教えるのが家庭科だ。「生きる科」という名前にしたい、というのが実感だ。

私は六十年間古い男として生きて来て、この五年半ばかり、「新しい男」として生きられるかどうかやってみている。家事を通して「新しい男」像を探し求めている。

戦後、民主主義教育が言われ、その花形だ

った社会科教師として男女平等ということも考えて来たが、今思えば実際には女性を無視していた。家事をしないで男女平等を説いてもむなしののだ。女性を無視することが、男の仕事もむなくさせる。男は上っ調子の根なし草文化をつくって来たのだ。

その反省から、六十才で退職したのを機に、家事を始めた。家事をやってみると、後始末が大事だということがわかる。核廃棄物や電池などの後始末が今問題になっているが、後始末を考えないで生産をする男が問題なのだ。

「運動は事務の堆積である」という市川房枝さんのことばがあるが、私は今「生きることは雑務の堆積である」と言いたい。雑務をていねいにやるのが生きるしるしだ。

共修運動は地動説のようなもので、始めは反対が多くても、「男女共修は進む」という確信を持っている。

III 丹原恒則さんのお話（要旨）

十八、九の頃、父母の生き方を見て「何かおかしい」と思った。深夜に酔って帰る父、やさしいけれど話し相手としてのたりない母――男ももっと余裕を持って生活をエンジ

ョイし、女も世間の荒波に直接ぶつかって知恵をつけるべきではないかと思った。

結婚した時、自分の方から妻に働き続けるように言ったが、妻は残業の多いところへ配転され、やせて体中痛がるようになり、遂に倒れてしまった。その時始めて料理をつくらうとした。野菜のためをつくることにしている。ろいろな野菜をこげないように弱火でいため、調味料も少しづついろいろ入れたらぐちゃぐちゃになって来たので、野菜スープにしように思っ牛乳を入れ、酒も少し入れてみた。妻は一口食べると表情が変わり、それ以上食べようとしなかった。ぼくは共同生活者としては「欠陥商品」だったのだ。

その後、なぜ彼女の職場の男たちは残業を受け入れるのだろうかと思ひ、いろいろ勉強したり、自分でも考えた。家のローンや教育費のために残業代をはしがる男の生き方が問題なのだ、女が働きにくいのは男の働き方の問題だ、女性問題は男性問題だ、共働きを続けるためには保育所の問題も解決しなければ、と思っている時に紹介する人があって育時連に入った。それから職場で一日二時間の育児時間を要求する自主グループをつくった。結局それは組合要求になったが、組合の壁は厚かった。成人した人の意識を変えるのはむず

かしい、これから人間形成する人は、「欠陥商品」でなく、男と女が近寄るようにできないか、と思った。

料理学校にも通ってみたがお金がかかる。学校の家庭科から排除されていたことについて裁判を起せないかと思っている。

IV 男子生徒の報告（要旨）

◆船越進さん（都立代々木高校四年）

代々木高は三部制の定時制高校で、働いている生徒が多い。自分の学年までは、二年では男子は商業、女子は家庭科をやり、三年のとき共修の家庭科をやった。一年下からは、三年と四年で二時間ずつ、四単位の共修の家庭科をやっている。

三年で習ったのは、食生活の歴史、食糧自給率の低下、途上国の食糧問題、食品添加物、農薬、合成洗剤のことなど。食品添加物と農薬の問題は特に印象に残った。新聞やテレビではあまり印象に残らない。授業で時間をかけてやると身にしみる。

避妊の学習では先生にも生徒にも多少のテレビはあったが、しっかり学習した。調理実習は5回やったが、楽しかった。

男女共修の家庭科では、男女の意見がわかっている。他の学校にもひろげてほしい。

（集会終了後、「学校で必修にしないと、男子はあまりやらないだろう」「新聞記事などをとり入れたプリントを使うと、今の問題として関心が深まる」という追加の意見がありました。）

◆金井遼太さん（拜島高校二年。瑞雲中学三年の時共学の家庭科を経験）

瑞雲中学では男女とも週二時間ずつ技術と家庭をやった。調理実習以外はあまり覚えていないが、学校の授業の中で一番楽しかった。男女でやるのは賛成だが、実際には女の子がほとんどやってくれて、自分たちは食べていればよかった。

高校へ入ってから料理を覚え出し、飲食店でバイトもした。学校でやらなくても覚えられると思うし、結婚してから女房に教わってもいいと思っている。

V 運動の提案

担当 中嶋 里美

提案の内容については、1ページをのぞいてください。

VI 情報・意見交換（一部）

●共修実現か？！

●検討会議委員の湯沢雅彦さんは、長岡で講演したとき、最後に次のように発言。「自分は家庭科はなくてもいい、選択でもいいと思っている」「最少単位で男女共学になるだろう」「共修の学校と女子だけの学校へ行ってみたら、共修の方が生徒が嬉々としていて活発だった」。最少単位の共修は二単位だろう。体育を二単位削るのは問題ないと検討会議では見ているようだ。（新潟からの参加者）

●検討会議で共修の話をしたとき「どこから単位を持ってくるのか」ときかれ、「体育と家庭科をならせば簡単に二単位つくれる。自由裁量の二単位も使えば四単位共修も無理ではない」と言っておいた。（和田世話人）

●「文部省はハラを決めた」という人もある。（半田世話人）

●現状維持運動はすこい！

●九月末地区家庭研究会で突然現状維持の陳情書が出て来て「誰が陳情に行くか」と言われた。事前の話し合いも何もなく全家庭科教師の意見とされては問題だが、「おかし

い」という意見が出たのは二地区だけ、他の地区では「選択になっては困るから」という雰囲気だったようだ。（千葉からの参加者）

●栃木県では共修を考えている人は村八分扱い。「そんな考えの人に染まらないように」などと言われる。中央女子高校高井校長（高校長協会家庭部会理事）を中心に、女子だけの授業を国会議員に見せたりしてがんばっている。（半田世話人）

●運動のすすめ方について

●湯沢さんは長岡の講演で「はがきは最初は一生けんめい読んだが、そのうちいやになった。あの方法はよくない」と言ったが、「共修賛成のはがきは二割、現状維持をうったえるのは八割」と言われると、やっぱり賛成のはがきが多い方がいいのではないかと思う。（新潟からの参加者）

●取材の記者から「女子必修」の人と「男女共修」の人と両方が話し合うことがどうしてできないのか」と言われた。話し合う努力をする必要がある。（半田世話人）

●実態を積み重ねることが必要。その場その場でやることをやるべきだ。（丹原さん）

●家庭科の教師も現場でやることはやっているが、今の段階では制度をかちとる努力をしよう。（芦谷世話人）

●中学の教育課程がひどい差別なのに言い立てる人が少ない。影響力からいえば、義務教育の中学の方が大きい。中学の問題についてもっと運動しなければ。（和田世話人）

●家庭科って何だろう？

●男が家事をやることには賛成だが、学校の家庭科でやらなければいけないということがわからない。自分は料理は好きでおかあさんから教わっている。（初めて来た男子高校生）

●親が教えてくれるとはかぎらない。「それより受験勉強をしなさい」と言われるのではない。中学、高校の柔軟な時期に学校でやれば身につく。技能を身につければその背景にも目が行くようになる。野菜がうまくない——土が死んでいる、ということに気づく。（丹原さん）

●生活的自立のための技能も必要だが、どう家庭をつくるかを男女いっしょに学ぶことが学校教育の中になければならない。（家庭科教師）

●世話人会でつくった試案で内容をつかんでほしい。（半田世話人）

●パンフを見て、それでもわからなければ授業を見て下さい。（芦谷世話人）

【司会 芦谷薫 馬場洋子
記録・まとめ 梶谷典子】

世話人会報告

△九月二十九日△

◆報告事項

●九月三日文部省の家庭科教育に関する検討会議で和田さんが発言、多くの質問を受けた。

●九月二十一日48団体主催の家庭科問題シンポジウムが開かれ、会場質問に会員も応答。その席で先のPTAの決議文に対し、抗議文を送ることが提案され、検討の運びとなった。

●各紙の投稿欄が賑わっている。

◆検討事項

●PTAの決議文に対し抗議文を出し、そのことを広く伝える。

●高校長協会家庭部会及び指導主事会と、今後話し合いの場を持つよう連絡をとる。

●十月二十七日集会の打合せ。

●十月二十日のNHK・YOUを始め、マスコミに注目、今後も積極的に各人対応の事。

（石川由紀）

△十月二十七日△

1. 集会直後、やや興奮ぎみの状態で、まず集会の感想を出し合いました。

★思ったより集まりはよかったです。

★一般参加者も男性が多くてよかったです。

★報告者もいつもと違った感じでよかったです。

★話はわかりやすかったです。

2. NHKテレビYOU、ニュースワイド（10ページ参照）について、多少不満の点はあった。でも、放送されてよかったと話し合いました。

3. 各地の状況、集会についての情報

★東京、埼玉、兵庫などでは、現状維持の署名運動は反対の声があって実施できなかった。

★48団体主催集会

★労基研中間報告、児童扶養手当改正案説明会 十一月九日 三時～五時 婦人会館で。

★均等法が通ったらどうなるか 十一月十九日 一時半～四時 主婦会館で。

4. 次のことを決めました。

★全国高校長協会家庭部会に協力要請文を送る。

★外務省にも男女共修早期実現の要望書を送る。

★国連婦人の10年推進議員連盟とはなかなか話し合えないが、連絡をとり続ける。

★会報号外を一月に出す。

★次の集会は二月初め。

★84年をふり返る会。十二月二十三日（日）

午後六時から渋谷「じょあん」で。会費四千元。参加申し込みは〇三・七〇一・八五七八石川由紀さんへ。

その時点の最新情報（検討会議の結論？）をまじえて一年を総括し85年からの運動を語りましょう。

その日三時からは同じ場所世話人会。世話人でない方もどうぞ。（梶谷典子）

高校長協会家庭部会あての

要請文の趣旨

「男女必修はすぐには実現できないから当面は現状維持がよい」と考えられているようだが関係者が力を合わせれば実現できる筈。

「中学の学習に男女差があるから」と言われるが、条約を批准するためには中学についても見直しが必要。いっしょに要求しよう。

「国民のコンセンサスが得られない」というが、各種調査をみても女子のみ必修こそ支持されていない。

「教員、施設、設備が問題」といわれるが、教育内容、教育方法を柔軟に考えれば解決できる問題。

家庭科を重要視されるなら「どうしたら男女必修が実現できるか」という方向で積極的に考えていただきたい。

国際婦人年日本大会の 決議を実現するための 連絡会報告

和田 典子

A 家庭科問題をめぐるシンポジウム

9月21日、48団体主催の集会在参議院議員会館でひらかれ、多くの団体が参加しました。はじめの経過報告では、和田が一九七五年以降のとりくみを、婦人年の前半・後半期にわけて48団体と政府・文部省側の動きを、対応させながら話しました。また、今年に入ってから、国会等の答弁で明らかになってきた政府・文部省側の変化に伴う各界の状況や、48団体の「中学・高校家庭科の見直しに関する申し入れ——6・15」を紹介したほか「家庭科教育に関する検討会議」の動向や、「会議」に対する各方面からの働きかけについてもふれました。

シンポジウムでのパネラーの提言は、

(1) 山本松代さん(トータルライフ研究センター)所長・戦後、男女共学家庭科誕生時の担当官)からは、昭和22年学習指導要領(試

案)を執筆するに至った経過やエピソードと

ともに、家事裁縫科はホームメーキングエデュケーション(家庭建設教育)という全く新しい教科に生れかわったことが語られました。

(2) 牧野カツコさん(横浜国立大学助教授)は、前述の「試案」を家庭科教育の原典として学生によませている実践を報告したあと、家庭科は「生命の生産・再生産のいとなみとしくみを学ぶ教科」であるから、他教科では代替できないこと、さらに生活者としての自立、性教育、民主的家族の建設にとって欠かさない教科であると話しました。

(3) 木下春雄さん(国民教育研究所員)は家庭科をめぐる状況として、教育臨調の「戦後教育見直し論」のなかで、進路・能力別に子どもをふりわけようとする中等教育の「多様化」の傾向が強くなっていることを批判し、そこでは必ず男女差別をとめない、男女共修をはばむ要因になると指摘しました。

(4) 青木彰子さん(長野市立早月高校教諭)は、県立梓川高校での十年をこえる、男女共修家庭科の経験をつまえて、大多数の生徒が支持すること、家事・育児に対する認識が深まり態度が変わるなどの意義があることを強調し、共修をきっかけに教師自身の研修や自己変革がすんだことを報告しました。

以上を受けて、フロアからは、
● 男女共修になった場合、これを教える教師の力量について不安はないか、との質問が出ました。

これに対しては参加者の高校教師から「大学での専門教養はきわめてせまいので、家庭科だけでなく、どの教科でも勉強しなければ教えられるものではない。研修は欠かせない」との回答があり、中学校の教師からも同様の発言のほか(それどころか)定員の関係から免許状なしで他教科を教えさせられている現状や、知っているだけで教えられないものではない具体例などが出されました。

● 次に、高校長協会や全国PTA連合会などの男女共修反対の運動やキャンペーンに対して、手をうつべきではないかとの質問が出ました。
これに対しては、48団体としても何らかの対応をはかるとの提言があり、諒承されました。

終りに、再度パネラーからしめくくりの発言がありシンポジウムは終わりました。

B 中学・高校家庭科の男女共修に ついての申し入れ

E 世界会議への民間婦人代表の参加

八五年の国際婦人年政府間世界会議は、七月十五〜二十六日までケニアのナイロビで開かれますが、この会の日本政府代表に民間婦人代表を複数で参加させるよう政府に申し入れました。

F 政府の均等法案を考える集会

日時 一九八四・十一・十九 后一時半
会場 主婦会館 規模 約二〇〇人
内容 法案の内容をよく知り、均等法が通ったかどうかについて現状と問題点をあきらかにする。

G 労働基準法研究会中間報告に ついてのヒアリング

さる10・5の全体会で、労働省労働基準局の岡崎氏より、第一部会(パートタイム労働対策の方向)第二部会(労働時間)の報告内容について説明をうけました。また、新任の松原巨子婦人局婦人政策課長のごあいさつがありました。

育をすべての男女に実施すること。

三、右を実施するための教育条件を整備し、早期実現をはかるよう措置すること。

C 他団体でのとりくみ

(1) 婦人有権者同盟では、今年度の総会に際して、家庭科問題を学習し、「会」発行の「一問一答」を代議員全員に配布しました。

(2) 新日本婦人の会では、都道府県の全責任者に「一問一答」を配布し、各地域で署名運動にとりくむことになりました。また「秋の大行動」の一つとして、本件について文部省に対する要請行動を行いました。

D 国連NGO企画委員会への 基金拠出

八五年の国際婦人年世界会議とともに行なわれるNGOフォーラム(七月八日〜十七日、ナイロビ)に、開発途上国が参加するための費用を、援助してほしいとの申し入れがありました。幸い、さる三月のエスカップ会計の残高が約六四・七万円ありますので、このうちの五〇万円を拠出することを、決めました。尚、NGOフォーラムへの参加についてはいづれ情報が入る予定です。

10月5日、午前中起算委員会で検討した標記に関する文案は、午後の全体会にかけられ各団体の意見をくみあげて、加筆・修正して次の内容案が決定しました。欠席団体の意見をきいた上で、文部大臣及び家庭科教育に関する検討会議議長あてに申し入れをするほか、共修反対運動をしている諸団体に対しても、48団体の意向として、つたえる予定です。

(申し入れの内容——前文は省略)

一、共修家庭科は、生活者として自立した人間の育成、健康にして文化的な家庭建設についての知識・技術の習得、子の養育・家庭責任を、男女が協力してなう民主的な家族関係についての認識と実践力を育てるものとする。

二、右の具体的、現実的措置として、家庭科及び技術・職業教育を次のように改めること。

(1) 中学校では、技術・家庭科を二系列に分離し、週当り各二時間を毎学年、男女共修(共学・必修)とすること。

(2) 高校では、体育単位の男女格差を排除し家庭一般を男女共修(共学・必修)とすること。

(3) 高校普通科でも、技術・職業に関する教

集会報告

進むも止まるも あなたしだい

―共修と平等法は
車の両輪―

坂本ななえ

十月二十日出、八丁堀毎都勤労福祉会館で開かれた「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」定例会。共修も平等法（均等法、と名称を変えられたが）もこの秋が正念場。それぞれ大きな高まりを見せている二つの運動は、生身の女にとっては実は一つのもの。トータルな生を生きるためには、どちらも譲れないギリギリの要求だ。

パネラーは四人。それぞれの立場から家庭科を、働くことを語ってくれた。

●松原慶子さん（日本女子大生。「共修をすすめる学生の会」）

日女大の家庭科教師のタマゴたちの間では、「共修はもう常識」と言う。キャンパスでの共修運動の広がりや反応を紹介。

●遠藤和枝さん（編物教師。「団地のをんな」発行人）

会場に住宅公団の大きなポスターが貼られ

た。にこやかな妊婦の写真の横に「そのぶん、僕が頑張ります」とのコピー。ああ、男はつらいよ。出産退職家事専門の妻と100%仕事人間の夫――役割分業の悲劇。

●桜井陽子さん（フリーライター）

自分の力で食べていきたい。だから彼女は東京に残り、お連れ合いは娘をつれて転勤先へ――そんな関係を「寒々しい」と言う人がある。性別役割に沿った「やさしさ」を要求する社会。大変だけど、でもやっぱり働くって素敵な事。

●芦谷 薫さん（高校教師）

家庭科を取り巻く緊迫した情勢を報告。特に高校PTA連合会の決議には会場の怒りがわき、「現行通り存続とは、性差別撤廃条約を批准しない、って事じゃないか」との声も。高P連への抗議と、家庭科教育検討委員へのハガキによる共修要請が行動提起された。

会場からは「職場の性差別は女の職業意識の低さが原因、と言われるが、学校がそう教育しているのでは」「新聞に、家事能力がなくて子殺しに走った父子家庭の記事が載っていた」等々活発な意見が出た。そして討議のあとはワインパーティ。運動はいい女友達との出会いから。話ははずみ、とても楽しい夜になった。

家庭科共修

マスコミでは

新聞、雑誌では

中嶋 里美

九月一日からの日経のオフィス論壇での特集「家庭科の男女共修」は五回の連載とまとめがせられた。担当者によると予想以上の投書が寄せられたとのこと。五回の連載で二四通の投稿がのったが、男女必修がよいとするもの十六通、男女選択が二通、必修部分と選択部分を分けるが三通、わざわざ学校でやる必要はないという不要論が二通、制度より内容を見直せが一通であった。校長会家庭部会が主張しているような「女子のみ必修」は一通も見られなかった。また共修に賛成している人の多くも内容については技術的な内容よりも生活のあり方について男女共に学ぶ科

目であって欲しいと述べていた。

「男女共必修にすべき」という意見を述べていた六〇才の男性鈴木さんは健康をそこね薬や注射で治らなかつた激痛が軽いジョギングと家事をする中で回復していった経験を述べ、食事づくりや裁縫も楽しんでやるようなことも内容に盛り込むべきだと言っている。また中学の教員である宮尾さんは、仕事の忙しさに追われ身のまわりの生活をなおざりにしている心が荒れてくると述べ、中学生の荒れも日常生活を大切にしていけないことと関係があると書いている。

☐

朝日新聞では九月一九日から週一回連続インタビュー「家庭科をどうする」が始った。第一回は米倉齊加年氏で男とか女とかで教育をわけるのはおかしい。「現にぼくの場合、家事、育児にかかわらないと芝居だって続けられない」と答えている。第二回は半田たつ子氏で戦後から現在迄の家庭科の歴史を述べ「家庭崩壊が大きな問題になっている今、男女が同じ教室で学び、意見を交わす」ことの重要性を強調している。第三回は「男女雇用平等法は文化の生態系を破壊する」という論文を書き批判を受けた長谷川三千子氏。インタビューに答えて女には女の役割があること

を肯定しているが、それでも女子のみが必修すればよいとは言っていない、必修か選択の二者択一ではなく、教師の自由裁量にまかせる教科だと言っている。また家事分担については「男女で分担すれば体の負担は楽になっても、つらさが半分になるとは思えません。二人の人間がづらい思いをするよりは、一人の人間がある程度まかせ……」と言っているが長谷川氏の考えには個人という概念が欠如しているように思えた。

第四回は長野県で共修の家庭科を教えている富松裕子氏。共修実践者として自信にあふれた受答えをしている。今の生徒が英語や数学で相当な能力を発揮していても、カップめんを食べ、起きたい時に起き、虫歯だらけという実態があること、家庭科はまともに生きていける力をつける科目であると述べている。第五回は東京の小学校の教諭で家庭科専科の福田三津夫氏。家庭科専科になったのは妻からどうして同じように働いているのに家事、育児をやらなにかとつきつけられたのがきっかけ。実際に家事、育児をやってみて「男は仕事、女は家事」の誤りに気がついたとのこと。男の家庭科教師が存在すること自体子供達に何らかの影響を与えるのではないかと考えたとのこと。生徒の父母や地域の人から

わからないところは教えてもらいながら授業をすすめている。この欄では今共修についての意見を募集している。

☐

共修をめぐる問題は新聞だけではなく週刊誌にも載った。『週刊平凡』十月十二日号には「男子生徒に家庭科授業などいらない対いや、男女とも必修にすべきです」の見出しのもとに家庭科をめぐる現在の動きと何人かの家事を得意とする男性へのインタビュー記事がのっている。CFプロデューサーの壇太郎氏は家庭科は大学の講座にあってもいいが料理や裁縫という楽しいものが評価の対象になることに疑問をなげかけており、声楽家の友竹正則氏も男女共に必修でやり、小学校四年から中二位まで継続してはどうかと提案している。家庭科専科の名取弘文氏は「家庭科こそ最もおもしろい授業になる可能性があるし受験体制を崩す力にもなる」と主張している。

☐

最後にいたましい事件のことについて書いておきたい。去る十月十三日、兵庫県の父子家庭で父親が中一の息子を列車から突き落した事件があったが、父親の自供によると「食事作りが面倒だった」（日経）ということである。

◆ テレビでは —

NHK YOU

「ムムッ／＼男子の家庭科」を見て

十月二十日教育テレビ

藤本 了江

主な内容は、若者達の実態を明らかにするために、買物からオムレツを作るまでに母親に助けてもらったり不器用な手つきで4人分2時間かかる様子。じゃがいもの皮むきを男にさせて危っかしい手つきと男女差よりも個人差を見せる。ケント・ギルバート氏（アメリカ人）の見た日本人の家庭生活。妻が夜遅くまで食事しないで夫を待つ異常さ。七時半過ぎれば夕食は出ないのがアメリカでは普通だ、という個人尊重、家庭人の自覚の要求。次に京都府立田辺高校の授業風景。保育の授業中の板書とお八つ作りのビスケットとジュースの男女実習、試食の様子。森幸枝先生の家庭科教育論。なぜ高校と云う発達段階で男女の家庭科が必要か、日常的生活を大切にすることを通して経済、加工品問題等を社会的、客観的、抽象的に、人間が人間らしく健康に幸せに暮すための男女協力の家庭生活の勉強であること。

男女の役割・本音テストで若者の分類が女性の方が多かったのにケント氏・山村君・菅原やすのり氏とだんだん男の役割増える様子。昔は家族揃って食事をしたこと、マナーや百姓の労働を感謝する気持ちを教えられたのが、今、バラバラで家庭教育機能の低下を語らせ、まとめの役としての菅原やすのり氏の言は一般人によく分りよかった。家庭科は習うチャンスが他にないから絶対必要。有名スターの引退を賛美してるが自己逃避では？結婚して家事に参加するのは人間が成長することだ。ゴミ捨てに行けば近所づき合いが始まる。…できないと云うのは自由を切り捨て壁を作ること、できれば自由は広がる。世界的に行動しようと思えばできないなんて云ってられない。今男性は女性に助けられて活躍し、家事は見えないから逃げようとする。女性は仕事も家事もできて当たり前、ハンディが大きい。最後に若者達に自立して生きていくには家庭科の授業は必要。と語らせて締めくくる。始め、「家事はやらんから家庭科はいらん」と云ってた生徒に最後に作ったスバゲッティが美味しかったと云わせ、他の必要だと云っていた男の子の方が賢く見えたのはよかった。申し出をしておいたせいか？家庭科は男女に必要と云う結びになったようであった。

朝のニュースワイドで

半田たつ子

「家庭科は男子にも必要だと思う人。えっ、ほんとだね」。長野県立須坂高校を取材した斎藤記者の言葉で始まった10月26日朝のNHKニュースワイド（東京ローカル）。須坂の他、明星学園（生活科として共修）の授業風景も映し、中島・大平両教諭は、きちんと家庭科観を語られた。須坂の生徒いわく「おもしろい。自分の生活に関することだから。受験勉強の合間にくるげいい」（男子）、「男子とやったほうがいい・男の子のためになる」（女子）。「女っぽくてつまらない」は一人。

僅か七分の番組枠で、私については「共修は当然」の部分しか流さなかったが、校長会の真意は出た。「選択こわい。日本の家庭は女でもっているのに、女子必修をやめるのはトンデモナイ話」（校井隆道氏）。20日の行動を起こす会の集会、22日の検討会議の様子を映し、「まだまだ議論しなければならぬことが残されている」と斎藤記者は結んだ。6月のNC9に比し、良心的な報道だった。

校長会の考える

家庭科は —

芦谷 薫

高校長会家庭部会の「家庭科教育の将来像を考える委員会」からの報告をうけて部会は「高等学校における家庭科教育の在り方について」という小冊子をこの九月に出した。「これからの家庭科」は、男女ともひとり

母性教育ってナニ？

梶谷 典子

共修に消極的な人たちは「女子には母性教育が必要だ」とよく言いますが、その内容がどんなものかは示されていません。どうやら、これまでの家庭科全体を母性教育として考えているようです。家庭運営について学び、家事技術を身につけることが母性を育てることになるらしいのです。ということとは、母性を「産む性」と考えるのではなく、子どもを産み育て、家庭を守り、家事万端を引き受けて家族のためにつくす

の人間として生きるための生活技術を身につけ、家庭や社会の中での人とのかわりや生き方を考え、現実生活の不合理を改善する力をつけることとし、「生活者としての自立」「生命の尊重と豊かな人間性」「生活文化の伝承と創造」という三本柱が輝くこの論文は、共修を願う私達が唱えてきた言葉が随所に見られ、ワクワクさせる。

しかし、子を産み育てるという役割と、家庭経営の中心的存在を女性と規定し、これからの女性は家庭と職業を両立させ、男性が積

昔のおかあさん、つまり伝統的な女の役割に縛られた良妻賢母のイメージで捉えているのです。

昔ながらの良妻賢母を育てる母性教育—冗談じゃない／差別撤廃条約の精神に真向から反するものじゃありませんか／

母性についての教育として本当に必要なのは、「母性とはどういうものか」「母性を守るにはどうしたらよいか」学習することでしょう。今まで男たちがそのことについてあまりに無知だったことを問題です。共修の家庭科で、男女いっしょにしっかり学習してほしいと思います。

極的に協力するという形の家庭が多くなるだろうから、現行の家庭一般の形態は、望ましいものとして認める。そして、男女の特性に応じた内容の研究が今後必要である。

そこで、小学校では生活技術の初歩を男女とも、中学校では衣食住の生活と子どもの生活、生活の作法を男女とも学ぶこととしている。

高校では、文化の伝承と創造の力をつける内容を中心とし、家族間の愛情、家庭の在り方、夫と妻の在り方、男女の責任などは男女とも学ぶ必要があるが、母性を育てる教育はすべての女子に必要、また、高齢化の進むなか自分のことは自分で責任をもつという原則を考えると、情報化社会に生きる消費者教育が必要としている。そして、生活技術が「人間性の伸長」に果たす役割が大であるから、母性、家庭経営の中心となるべきV高校女子生徒には「特に生活技術を学習させておかなければならない」という結論なのだ。

高校の段階になると突然「男女の特性」論が巾をかきすもので、小学中学段階で見せた立派な論が色あせる不思議な論文であった。何としても「良妻賢母主義の教育」を時代にマッチした装いでごまかしながら継続したいようだ。

男性ばかりで つくられた

P T A 決議文

樋口 恵子

九月八日、神奈川県立婦人総合センターで開かれたフェスティバル「女性がつくる老後の文化」(高齢化社会をよくする女性の会・神奈川県共催)のメイン・ホール。「高齢化社会を支える教育と文化」のシンポジウムで満席の会場から手をあげて発言した女性がありました。練馬区から参加したMさん。都立高校のPTA副会長です。

「高齢化社会を支える教育といえば、真っ先に思いあたるのは、男女とも生活者として自立した人間に育てる家庭科の男女共修です。婦人差別撤廃条約の批准に向けて、もちろん男女共修の方向へ、世論も政策も進んでいるものと思っておりました。ところが、私が参加した八月末の全国高校PTA大会で、突然、最後の全体集会で、家庭科は今までどおり女

子のみ必修で、という決議案が出されたのです。それまでの分科会でも、どこでも、この問題は少しも議論されなかったのに、だれが決めたのか、三つしかない決議案の一つに収まっていたのです。」

Mさんはびっくりすると同時に怒りがこみ上げてきました。そして「質問!」と挙手をしたのですが、その声も手も、四千人を越す大集団の「賛成!」の声と拍手の中に埋もれてしまいました。

「それでも、もっと勇気をふるって言うべきだったのかもしれない。その悔恨をこめてきょうはどうしても発言したくてやってきました。」

Mさんは、あとで私に全国高校PTA大会の資料を手渡してくれました。「ほんとに、だれがあのような決議文をつくったのでしょう」と言いながら。

だれがつくったかはともかく、決定機関は資料で十分に想像できます。大会役員は、全国の会長はじめ各ブロックの代表、開催地鹿児島県の代表と合わせて九名、全員男性。大会運営委員は、各都道府県PTA連合会の会長の名がずらり並んでいます。ここにも女性の名は皆無。大会実行委員——こちらは開催県の人の名まえが並んでいます。五名の最高

幹部は全員男性、そして実行委員は五八名もいるのですが、女性は県P連副会長の肩書きを持つただ一人。結局、大会関係役員の名簿に百人以上の名があるというのに、役員として女性が名をつらねたのはこの人只一人。あとは事務局員として職員の名の中にチラホラ女性の名が見えただけでした。Mさんも「フロアー」の参加者の中には、もちろんPTAですから女性もいましたが、壇上にずらりと並んだ人たちは全員男性ばかりでした」と言います。

青少年非行の問題を「母性」のみの責任と結びつけ、女子にこそ家庭科を、と要請したあの決議文。問題はより直接的に女性の問題(裏返せば男性の問題ではありません)であるにもかかわらず、女性がその決議には全く参画していない、ということががわかります。それにしても「両親」と教師の会であるはずなのに、そして何かという子育てに「母の責任」を強調するのに、方針決定の場に女性ゼロ、というのは、まさに日本社会の縮図を見る思いではありませんか。そのことのおかしさに、当事者が全く気づいていないのが不思議です。家庭科の男女共修が実現すれば、こういう場面で「おかしい」と気づく感性を育ててくれるものと期待しています。